

とくずされ、自分の庭の植木以外に緑がなくなっていくのをどおしよりもなかつた。私たちの山の上まで、風の具合で工場からの煙が流れてくるようになった。この磯子も二年半くらいで、またまた転勤で土浦へ移ってきた。

土浦には、まだまだ緑の土地があり、のびるやよもぎなどを家の年寄りもよろこんで取りにいつている。そして謡曲にもうたわれた桜川の上を私はいま毎日病院通いに往復しているが、釣り人が糸をたれ、葦の間に古びた舟が二隻とまっています、山桜が咲きかけている。

謡曲の桜川では、狂女が子供を探し求めて、桜川を舞台に、「花散れる水のまにまに……；桜花」と紀貫之がはるか常陸国の春の桜川に桜がたくさん咲いていた頃をうたい、「名も桜川、ありと聞きて……；春べになれば桜川……；瀬々の日波しげければ、雲を流す信太の浮鳥の浮かめかめ水の花げに面日き川瀬かな」、「散ればぞ波も桜花、流るゝ花を抄はん」と詠み、またわかさを桜魚といって、桜の花びらといっしょにわかさをすくゝ、「わが桜子ぞ恋しき」と、昔からこのように桜川を舞台に親子の対面がうたわれている。

私は土浦に移ってくるまでは、史蹟にうたわれた桜川はどのような川か、きれいな水が流れているだろうと期

待していた。だが、釣っても臭くて食べられない「鮎」ではどうしようもない。

昔のような美しい桜川、きれいな桜川をとりもどし、「川のある町」を守っていきたいものだと思う。

了

歩道橋でジャンケンをする母子がいて

筑波のくつきりみえる夕焼け

畠山 孤道（流れ藻より）